

## 中学生の教師に対する信頼感と学校生活スキルとの関連

中井大介\*  
庄司一子\*\*

### 問 題

本研究の目的は、学校教育における教師と生徒の信頼関係の重要性と、思春期における特定の他者との信頼関係の重要性を踏まえ、中学生の教師に対する信頼感と学校生活スキルとの関連を検討することである。

近年、学校教育の中で不登校・学級崩壊などさまざまな問題が発生し、授業など日常生活の中で生徒と直接関わる教師の重要性が改めて指摘されている(石隈, 1999; 大野, 1997)。教師-児童生徒関係の研究については、教師との関係が児童生徒の学習の基盤を成し、児童生徒の学級適応や人格形成にまで影響を及ぼすことがこれまでの研究で指摘されている(浜名・北山, 1988; 河野, 1988)。

例えば、近藤(1994)は、教師の児童に対する評価を表わす「教師内地位指数」と児童のスクール・モラルとの関連を検討し、教師の理想や要請に近い児童ほど学級適応感が高く、遠い児童ほど学級適応感が低い傾向であることを明らかにしている。また、飯田(2002)は、教師の児童認知だけでなく児童の教師認知を視野に入れ、教師の児童認知に加え、教師の要請に対する児童個々の要請認知のあり方が、学級適応感を規定する重要な要因であることを指摘している。

このような研究の中で、生徒の学級適応に影響を及ぼす要因として、教師と生徒の「信頼感」の重要性が指摘されている(小林・仲田, 1997)。また、生徒のメンタルヘルスの観点からも、生徒の特定の他者への「信頼感」の必要性が指摘

されている(酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002)。

このように、教師-生徒関係や思春期の生徒のメンタルヘルスにおいて重要とされている信頼感であるが、学校での教師-生徒関係の「信頼感」に焦点を当て検討したものは報告が少ない。教師の勢力資源に関する研究など(浜名・天根・木山, 1983)、従来、教師と児童生徒の人間関係の研究とされていたものは、児童生徒が教師の指導態度・指導行動をどのように認知しているかといった、信頼される教師側の特性である「信頼性」についての研究がほとんどであった。

山岸(1998)は、「信頼」に含まれる多義性が区別されていないことを指摘し、信頼と信頼以外の類似の概念を整理している。その1番目の区別として、「信頼性」と「信頼」の区別をあげ、「信頼」を「相手の信頼性の評価」、「信頼性」を「相手が信頼に値する行動をとる傾向性」としている。つまり、「信頼性」は信頼される側の特性であるのに対し、「信頼」は信頼する側の特性あり、両者は区別されるとしている。教師-児童生徒関係の重要性を踏まえれば、教師の信頼性の側面だけでなく、児童生徒の信頼感の側面からも、教師と児童生徒の関係について検討する必要があると考えられる。

信頼感については、これまでもあらゆる人間関係に影響を及ぼす変数として、協力や相互作用が必要とされるすべての社会的状況で欠かすことのできない問題として指摘されてきた(Johnson & Swap, 1982; Rotter, 1980)。信頼感の定義については、研究者の間で明白な一致は見られていないが、Rempel & Holms & Zanna (1985)は、信頼感に関する文献を検討

\* 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科

\*\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

し、信頼感に共通して見られる概念として、(a)「パートナーの行動の予測可能性」、(b)「パートナーの行動を頼りになるとみなすこと」、(c)「パートナーとの関係性に対する自信と安心感」という3つの概念を挙げている。Rempel & Holms & Zanna (1985) は、これらの概念を踏まえ、信頼感を「パートナーを信じて、頼ることであり、パートナーとの関係性に対する自信と安心感」と定義している。

信頼感に関する研究は、大きく分けて、Erikson (1959) を中心とする精神分析理論による基本的信頼、Rotter (1967) を中心とする社会的学習理論による対人的信頼、実験社会心理学におけるゲーム理論、の3つの方向から研究されてきている。

その中で、従来の信頼感に関する研究は、質問紙によって対人的信頼を測定するものがほとんどであった。質問紙による信頼感の測定は、測定の対象によって「他者一般に対する信頼」、「特定の他者に対する信頼」に分類される。しかし、信頼感については、特定の状況や関係によりその内容が異なる可能性が指摘されているが (Johanson & Swap, 1982)、これまでの研究では、「特定の他者に対する信頼感」を測定する尺度が少ないと指摘されている (Anderson & Dedrick, 1990)。そのため、近年の信頼感に関する研究では、医療者 - 患者、専門職 - 秘書、上司 - 部下など、親密な関係や特定の状況における信頼感に関する研究が行われるようになってきている (Rempel, Holmes & Zanna, 1985)。

教師 - 児童生徒関係が、児童生徒の友人関係などと同様に、学校教育の1つの基盤をなし、児童生徒の学級適応などに影響を与えていることを踏まえれば、「特定の他者に対する信頼感」である、児童生徒の教師に対する信頼感を詳細に検討する必要があると考えられる。

このような観点から、中井・庄司 (2006) は、これまで思弁的論考にとどまっていた、生徒の教師に対する信頼感について、「生徒の教師に対する信頼感尺度」(Students' Trust for Teachers; 以下 STT 尺度) を作成し、生徒の教師に対する信頼感が「安心感」、「不信」、「正当

性」の3側面で捉えられることを実証的に明らかにした。しかし、生徒の教師に対する信頼感については、その関連要因の検討など未だ実証的な研究が少ない。そのため、このような生徒の教師に対する信頼感が生徒の実際の学校生活に関する心理的要因とどのように関連するのか実証的な検討を重ねる必要があると考えられる。

児童生徒の実際の学校生活に関する心理的要因の1つとして学校生活スキルという概念がある。飯田・石隈 (2002) は、中学生に関わる問題傾向の増加を背景に、学校心理学の視点から中学生に対する予防・発達促進的サービスの充実を目指し、中学生が学校生活を送るうえで出会う教育課題と、一人の個人として出会う発達課題の解決に求められるスキルとして、「学校生活スキル」という概念を提唱した。

この中で、飯田・石隈 (2002) は、学校生活スキルとは、「①学習される、②学習面、社会面、進路面、健康面の領域で、中学生が抱える発達課題・教育課題の解決を促進する、③学校適応において個人の目標達成に有効である、④学校という場面で受容される、⑤学校で教育できる」行動であると定義している。飯田 (2003) は、中学生を対象に、この学校生活スキルと学校生活満足度との関連を検討し、学校生活スキルが学校生活満足度と密接に関連することを明らかにした。

既述のように、これまで重要とされてきた中学生の教師に対する信頼感は思弁的論考に留まっており、生徒の教師に対する信頼感の内容を明らかにし、生徒の実際の学校生活に関する心理的要因との関連を実証的に検討した研究は報告が限られている。このようなことを踏まえれば、生徒の学校場面でのスキルを幅広く測定することができる学校生活スキルと生徒の教師に対する信頼感との関連を検討することによって、生徒と教師の信頼関係が生徒の学校生活場面における心理的要因とどのように関連するのかを明らかにすることができると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、発達的に思春期に位これまで思弁的論考にとどまっていた生徒の教師に対する信頼感と生徒の学校生活スキル

との関連を実証的に検討することを目的とする。  
生徒の教師に対する信頼感と学校生活スキルの関連を検討することによって、最終的には生徒のメンタルヘルスの維持や教育実践の質の向上に寄与すると考えられる。

## 目 的

中井・庄司(2006)が作成した「生徒の教師に対する信頼感尺度」(Students' Trust for Teachers; 以下 STT 尺度)の各下位尺度と、飯田・石隈(2002)の作成した「学校生活スキル尺度」の各下位尺度の関連を検討する。

## 方 法

### 調査対象

首都圏 2 県の 2 つの公立中学校について、各校とも 1 クラス単位の調査を実施した。内訳は、中学 1 年生 155 名(男子 84 名, 女子 71 名)、中学 2 年生 141 名(男子 73 名, 女子 68 名)、中学 3 年生 161 名(男子 79 名, 女子 82 名)、合計 457 名。

### 調査内容

①STT 尺度 生徒の教師に対する信頼感の測定については、生徒の教師に対する信頼感の内容を詳細に捉えるために、中井・庄司(2006)の作成した「STT 尺度」を使用した。この「STT 尺度」については、内容的妥当性の検証において一致率の基準が 60%と低めであったことや、項目数が 40 項目と若干多めであったことから、実施に際しては「STT 尺度」を修正した 31 項目の尺度を使用した。修正にあたっては、心理学・教育学を専攻する大学院生 5 名で内容的妥当性及びワーディングに関する検討を行い、一致率が 80%を下回る項目、各因子において因子負荷が低い項目を修正・削除した。この尺度について「非常にそう思う(4点)」から「まったくそう思わない(1点)」までの 4 件法で回答を求めた。

②学校生活スキル尺度 飯田・石隈(2002)の作成した「学校生活スキル尺度」との関連を

検討した。この尺度は、自分で行う学習に関するスキルである「自己学習スキル」、進路決定に必要なスキルである「進路決定スキル」、集団活動の際必要とされるスキルである「集団活動スキル」、健康維持に関わるスキルである「健康維持スキル」、同年代の友人と異性とのかかわり関するスキルである「同輩とのコミュニケーション・スキル(以下、同輩関係スキル)」の 5 つの下位尺度で構成され、信頼性と妥当性が確認されている。本研究では各因子に高く負荷している上位 5 項目を選択して使用した。「自己学習スキル」は「勉強をするために家で机に向かうことができる」など 5 項目からなる。「進路決定スキル」は「将来役に立ちそうな、伸ばすべき自分の才能が何であるか考える」など 5 項目からなる。「集団活動スキル」は「集団で行動するとき、自分の番が来るまで待つことができる」など 5 項目からなる。「健康維持スキル」は「体の調子がおかしいとき、自分の状態を言葉で伝えることができる」など 5 項目からなる。「同輩関係スキル」は「友だちに自分の考えを打ち明けたいとき、どう表現するのかわからない」など 5 項目からなる。これら全 25 項目について、「非常にそう思う(4点)」から「まったくそう思わない(1点)」の 4 件法で回答を求めた。各因子の内的整合性については、「自己学習スキル」が  $\alpha = .64$ 、「進路決定スキル」が  $\alpha = .73$ 、「集団活動スキル」が  $\alpha = .70$ 、「健康維持スキル」が  $\alpha = .63$ 、「同輩関係スキル」が  $\alpha = .73$ 、であった。

### 調査時期および実施方法

調査の実施時期は 2005 年 6 月～7 月。調査の手続きは、調査対象者の在籍する学級単位で授業時間などを用いて集団で実施された。具体的な方法は、まず、学級担任が質問紙を一斉に配布し、学級担任の指示のもとで一斉に回答が求められた。調査を実施する場所は普段授業を受けている教室が用いられた。調査を実施する教師全員に「調査マニュアル」が配布され、調査中の回答で不明な点があった場合には学級担任が適宜対応するよう求めた。質問紙調査は無記名式で行い、調査対象者の回答の匿名性が確

保されることを質問紙に明記した。また、調査に対する同意については、質問への回答は自由意志であること、答えられない項目や、答えたくない項目は無理に答えなくてよいことを質問紙に明記した。さらに、教師本人の調査実施による、回答への影響を避けるために、「学校の先生方がみなさんの回答をご覧になることはありません。」「名前を記入する必要も無いので、安心して、自分の気持ちを、できるだけありのままにこたえてください。」という記述を質問紙のフェースシートに明記した。これらの方法はすべての学年において共通であった。統計処理には、SPSS (Version12.0) を使用した。

## 結果

### 1. 各尺度の基本統計量と学年差・性差

分析に先立ち、「STT 尺度」の因子分析を行った。まず、「STT 尺度」の各調査項目について項目分析を行うため、天井効果・フロア効果を検討した。平均値が 1.5 以下または 3.5 以上、平均値  $\pm 1$  標準偏差の値が尺度の上限値を上回っている項目、もしくは、下限値を下回っている項目を検討したところ、問題のある項目は認められなかった。次に、パラフレーズの問題を確認するため総項目間相関を算出したところ  $r = .90$  以上の相関は認められなかった。以上、項目分析の結果から問題のある項目は認められなかった。よって、全 31 項目について、スクリー基準に基づく因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。

その結果、初期解における固有値の減衰状況と解釈可能性から最終的に 3 因子が抽出された (Table 1)。第 1 因子は、「私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する」、「先生にならいつでも相談ができると感じる」など 11 項目からなる。第 1 因子には「教師がいることによる安心感」に関する項目と「教師との関係性に対する安心感」に関する項目が含まれていると考えられる。よって第 1 因子を「安心感」と命名した。第 2 因子は、「先生は自分の考えを押し付けてくると思う」など 10 項目からなる。

これらの項目は、教師に対する不信に関する項目であると考えられる。よって、第 2 因子を「不信」と命名した。第 3 因子は、「先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う」など 10 項目からなる。これらは生徒が教職という職業についている教師に対して期待している、教師としての正当性に関わる項目が含まれていると考えられる。よって第 3 因子を「正当性」と命名した。因子分析の結果得られたこれらの 3 因子は、中井・庄司 (2006) の結果と一致するものであった。各因子の内的整合性については、「安心感」が  $\alpha = .94$ 、「不信」が  $\alpha = .90$ 、「正当性」が  $\alpha = .89$  であった。

次に、各尺度の基本統計量と学年差・性差を算出した (Table 2)。学年 (1 年生・2 年生・3 年生) と性 (男子・女子) を要因とする 2 要因分散分析を行った結果、「STT 尺度」については、「安心感」で、学年の主効果が認められ ( $F(2, 427) = 9.05, p < .001$ )、Tukey 法による多重比較の結果、1 年生が 2 年生より、1 年生が 3 年生より有意に高い得点を示していた。「不信」では、学年の主効果が認められ ( $F(2, 426) = 13.20, p < .001$ )、Tukey 法による多重比較の結果、3 年生が 1 年生より、2 年生が 1 年生より有意に高い得点を示していた。「正当性」では、学年の主効果が認められ ( $F(2, 421) = 15.57, p < .001$ )、Tukey 法による多重比較の結果、1 年生が 2 年生より、1 年生が 3 年生より、2 年生が 3 年生より有意に高い得点を示していた。交互作用はいずれも認められなかった。

「学校生活スキル尺度」については、「自己学習スキル」で、性の主効果と学年の主効果が認められた。性の主効果では、男子が女子よりも有意に高い得点を示していた ( $F(1, 448) = 8.98, p < .01$ )。学年の主効果では、Tukey 法による多重比較の結果、1 年生が 3 年生よりも有意に高い得点を示していた ( $F(2, 448) = 3.37, p < .05$ )。「進路決定スキル」では、学年の主効果が認められ ( $F(2, 443) = 4.73, p < .01$ )、Tukey 法による多重比較の結果、1 年生が 3 年生よりも有意に高い得点を示していた。「集団活動スキル」では、性の主効果が認められ ( $F(1, 439) =$

Table 1 STT尺度の因子分析結果(プロマックス回転後)と因子間相関

項目	F1	F2	F3
<b>第1因子 安心感 (<math>\alpha = .94</math>)</b>			
先生にならいつでも相談ができると感じる	.94	-.04	-.17
私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する	.91	.07	-.06
私は先生と話すとき気持ちが楽になることがある	.85	.01	-.03
先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる	.80	.03	.03
私が悩んでいるとき、先生が私を支えてくれていると感じる	.77	.05	.02
将来のことがわからないときは先生に相談してみようという気になる	.77	.00	-.03
先生はいつも私のことを気にかけてくれると思う	.58	-.04	.15
先生は私を大事にしてくれていると感じる	.56	-.07	.19
私が失敗したとき、先生なら私の失敗をかばってくれると思う	.55	-.02	.13
先生は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う	.54	-.04	.23
先生なら私との約束や秘密を守ってくれると思う	.45	-.16	.22
<b>第2因子 不信 (<math>\alpha = .90</math>)</b>			
先生は自分の考えを押し付けてくると思う	.09	.77	.02
先生は自分の機嫌で態度が変わると思う	-.09	.76	.21
先生は一度言ったことを、ころころ変えると感じる	.12	.74	-.09
先生の性格には裏表があるように感じる	-.02	.73	-.01
先生は威張っているように感じる	-.08	.70	.03
たとえ間違っているときでも、先生は自分の間違いを認めないと思う	.08	.69	-.09
先生は言っていることと、やっていることに矛盾があると思う	-.05	.68	.05
先生は一部の人を、ひいきしていると思う	-.02	.67	.05
先生は他の生徒と私を比べていると感じる	-.05	.66	.02
先生の考え方は否定的だと思う	.00	.64	-.08
<b>第3因子 正当性 (<math>\alpha = .89</math>)</b>			
先生は悪いことは悪いとはっきり言うと思う	-.09	.06	.72
先生は自信を持って指導を行っているように感じる	.01	.11	.72
先生は教師としてたくさんの知識を持っていると思う	-.01	-.04	.71
先生は正直であると思う	.05	-.04	.65
先生は質問したことにはきちんと答えてくれる	.07	-.07	.64
先生は決まりを守ると思う	-.05	-.15	.62
先生には正義感が感じられる	.13	-.10	.61
先生には教育者としての威厳があると思う	.02	.14	.60
先生は何事にも一生懸命であると思う	.13	-.07	.59
私が間違っているときは、先生ならきちんと叱ると思う	.03	.08	.57
累積寄与率 (%)	45.35	53.66	59.30
因子間相関	F1	—	-.57
	F2	—	-.58
	F3	—	—

枠内は因子負荷量の絶対値が .40以上

Table 2 各尺度の基本統計量及び学年差・性差

[STT尺度]	男子			女子			主効果		交互作用	多重比較
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	学年	性別		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	F値	F値	F値	
安心感	2.68 (.56)	2.51 (.75)	2.41 (.77)	2.74 (.61)	2.37 (.79)	2.31 (.75)	9.05 ***	.73	.75	1>2, 1>3
不信	2.17 (.51)	2.34 (.77)	2.60 (.71)	2.15 (.72)	2.56 (.74)	2.54 (.71)	13.20 ***	.49	1.63	2>1, 3>1
正当性	3.24 (.45)	3.08 (.62)	2.83 (.72)	3.24 (.45)	2.99 (.59)	2.84 (.71)	15.57 ***	.25	.33	1>2, 1>3, 2>3
<b>[学校生活スキル尺度]</b>										
自己学習スキル	2.63 (.52)	2.57 (.57)	2.55 (.56)	2.86 (.51)	2.68 (.47)	2.65 (.45)	3.37 *	8.98 **	.73	1>3
進路決定スキル	2.73 (.57)	2.69 (.61)	2.59 (.65)	2.88 (.68)	2.69 (.61)	2.58 (.62)	4.73 **	.60	.77	1>3
集団活動スキル	3.05 (.53)	3.12 (.56)	3.10 (.54)	3.30 (.50)	3.23 (.54)	3.19 (.49)	.15	8.63 **	1.08	
健康維持スキル	2.72 (.64)	2.78 (.67)	2.82 (.56)	3.00 (.58)	2.88 (.62)	2.82 (.58)	.17	5.02 *	2.10	
同輩関係スキル	2.29 (.69)	2.18 (.66)	2.34 (.61)	2.14 (.74)	2.04 (.67)	2.10 (.59)	1.13	7.88 **	.24	

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

8.63,  $p < .01$ ), 女子が男子よりも有意に高い得点を示していた。「健康維持スキル」では, 性の主効果が認められ( $F(1, 439) = 5.02, p < .05$ ), 女子が男子よりも有意に高い得点を示していた。「同輩関係スキル」では, 性の主効果が認められ ( $F(1, 436) = 7.88, p < .01$ ), 男子が女子よりも有意に高い得点を示していた。交互作用はいずれも認められなかった。

## 2. 生徒の教師に対する信頼感と学校生活スキルとの関連

「STT 尺度」と「学校生活スキル尺度」との関連を検討するために, 学年別に相関係数を算出した (Table3)。その結果, 1 年生では, 「安心感」「正当性」と「同輩関係スキル」以外のすべての下位尺度との間に弱～中程度の正の相関, 「不信」と「集団活動スキル」「健康維持スキル」との間に弱い負の相関, 「同輩関係スキル」との間に弱い正の相関が認められた。2 年生では, 「安心感」「不信」「正当性」と「同輩関係スキル」以外のすべての下位尺度との間に弱～中程度の相関が認められた。3 年生では, 「安心感」「不信」「正当性」と「同輩関係スキル」以外のすべての下位尺度との間に弱～中程度の相関が認められた。

## 3. STT 尺度の類型による学校生活スキル尺度下位尺度得点の差

教師との関係性と生徒の学校生活スキルがどのように関連するかを検討するため, 「STT 尺度」の下位尺度を類型化し, 「学校生活スキル尺度」との関連を検討した。「STT 尺度」下位尺度の分類は, 五十嵐・萩原 (2005) の分類法にならない以下の方法で行った。まず, 1 つの下位尺度得点 - (残りの 2 つの下位尺度得点の和/2)

>0 であれば, ある下位尺度得点が残りの下位尺度得点よりも個人内で優位であり, その型の信頼感を有していると考えた。さらに, 複数の下位尺度得点が優位である場合, それらの混合型の型を有していると考えて抽出した。

各下位尺度の得点を以上の基準で分類した結果, 「安心感」のみが優位であるもの, 「安心感」と「不信」がいずれも優位であるものは少なかったため, 分析からは除外することとした。「安心感」と「正当性」のいずれもが優位なものは, 教師に対する信頼感が高いと考えられるため「信頼」型と命名した。また, 「正当性」と「不信」のいずれもが優位なものは, 教師に対して信頼と不信といった両面的な感情を有していると考えられることから, 「アンビバレント」型と命名した。これら信頼感の類型による「学校生活スキル尺度」得点の差を検討するために, 学年別に信頼感の類型を要因とする 1 要因分散分析を行った (Table4)。

その結果, 1 年生においては, 「集団活動スキル」で, 類型の主効果が認められ ( $F(3, 381) = 5.01, p < .01$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 「信頼型」が「正当性優位型」よりも有意に高い得点を示していた。

2 年生においては, 「自己学習スキル」で, 類型の主効果が認められ ( $F(3, 387) = 7.50, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 「正当性優位型」が「不信優位型」よりも, 「信頼型」が「不信優位型」よりも有意に高い得点を示していた。「進路決定スキル」では, 類の主効果が認められ ( $F(3, 383) = 6.94, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 「信頼型」が「不信優

Table 3 STT 尺度と学校生活スキル尺度の相関係数(学年別)

	1年生			2年生			3年生		
	安心感	不信	正当性	安心感	不信	正当性	安心感	不信	正当性
【学校生活スキル尺度】									
自己学習スキル	.37 **	-.03	.23 **	.41 **	-.26 **	.43 **	.38 **	-.17 *	.33 **
進路決定スキル	.36 **	-.10	.31 **	.46 **	-.26 **	.45 **	.42 **	-.26 **	.32 **
集団活動スキル	.42 **	-.19 *	.44 **	.44 **	-.29 **	.52 **	.35 **	-.20 *	.36 **
健康維持スキル	.42 **	-.17 *	.18 *	.48 **	-.28 **	.44 **	.22 **	-.16 *	.20 *
同輩関係スキル	-.14	.24 **	-.12	-.01	.09	.06	.04	.04	.05

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

Table 4 STT尺度の類型による学校生活スキル尺度得点の差

1年生						
	A 不信優位 <i>n</i> = 8~9 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	B 正当性優位 <i>n</i> = 32~34 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	C 信頼 <i>n</i> = 56~57 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	D アンビバレント <i>n</i> = 17~18 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>F</i> 値	多重比較
【学校生活スキル尺度】						
自己学習スキル	2.67 (.46)	2.64 (.46)	2.91 (.52)	2.63 (.68)	2.51	
進路決定スキル	2.82 (.61)	2.76 (.60)	3.00 (.60)	2.72 (.64)	1.56	
集団活動スキル	3.09 (.30)	3.03 (.57)	3.41 (.44)	3.14 (.52)	5.01 **	C>B
健康維持スキル	2.88 (.49)	2.67 (.69)	3.04 (.64)	2.69 (.69)	2.66	
同輩関係スキル	2.45 (.86)	2.28 (.61)	2.08 (.70)	2.20 (.79)	.99	
2年生						
	A 不信優位 <i>n</i> = 21~22 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	B 正当性優位 <i>n</i> = 31 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	C 信頼 <i>n</i> = 47~49 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	D アンビバレント <i>n</i> = 29 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>F</i> 値	多重比較
【学校生活スキル尺度】						
自己学習スキル	2.22 (.60)	2.66 (.44)	2.81 (.49)	2.61 (.44)	7.50 ***	B>A, C>A, D>A
進路決定スキル	2.32 (.63)	2.70 (.44)	2.96 (.57)	2.55 (.70)	6.94 ***	C>A, C>D
集団活動スキル	2.74 (.74)	3.14 (.44)	3.46 (.39)	3.12 (.55)	10.12 ***	B>A, C>A, C>B, C>D, D>A
健康維持スキル	2.51 (.83)	2.71 (.45)	3.14 (.56)	2.64 (.67)	7.57 ***	C>A, C>B, C>D
同輩関係スキル	2.06 (.67)	2.20 (.49)	2.02 (.76)	2.23 (.71)	.76	
3年生						
	A 不信優位 <i>n</i> = 32~33 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	B 正当性優位 <i>n</i> = 36 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	C 信頼 <i>n</i> = 38~39 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	D アンビバレント <i>n</i> = 30~31 <i>M</i> ( <i>SD</i> )	<i>F</i> 値	多重比較
【学校生活スキル尺度】						
自己学習スキル	2.34 (.57)	2.62 (.39)	2.78 (.47)	2.56 (.49)	5.15 **	C>A
進路決定スキル	2.30 (.66)	2.53 (.57)	2.96 (.55)	2.46 (.68)	7.52 ***	C>A, C>B, C>D
集団活動スキル	2.91 (.47)	3.22 (.45)	3.35 (.55)	3.07 (.46)	5.43 **	B>A, C>A
健康維持スキル	2.68 (.45)	2.76 (.60)	2.98 (.61)	2.87 (.63)	1.81	
同輩関係スキル	2.10 (.61)	2.29 (.53)	2.15 (.67)	2.25 (.54)	.73	

\*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ 

位型」「アンビバレント型」よりも有意に高い得点を示していた。「集団活動スキル」では、類型の主効果が認められ ( $F(3, 381) = 10.12, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果、「正当性優位型」が「不信優位型」よりも、「信頼型」が「不信優位型」「正当性優位型」「アンビバレント型」よりも、「アンビバレント型」が「不信優位型」よりも有意に高い得点を示していた。「健康維持スキル」では、類型の主効果が認め

られ ( $F(3, 380) = 7.57, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果、「信頼型」が「不信優位型」「正当性優位型」「アンビバレント型」よりも有意に高い得点を示していた。

3年生においては、「自己学習スキル」で、類型の主効果が認められ ( $F(3, 387) = 5.15, p < .01$ ), Tukey 法による多重比較の結果、「信頼型」が「不信優位型」よりも有意に高い得点を示していた。「進路決定スキル」では、類の主効

果が認められ ( $F(3, 383) = 7.52, p < .001$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 「信頼型」が「不信優位型」「正当性優位型」「アンビバレント型」よりも有意に高い得点を示していた。「集団活動スキル」では, 類型の主効果が認められ ( $F(3, 381) = 5.43, p < .01$ ), Tukey 法による多重比較の結果, 「正当性優位型」が「不信優位型」よりも, 「信頼型」が「不信優位型」よりも有意に高い得点を示していた。

## 考 察

本研究の目的は, 中学生の教師に対する信頼感と中学生の学校生活における心理的要因との関連を実証的に検討するため, 「STT 尺度」と「学校生活スキル尺度」との関連を検討することであった。

第 1 に, 「STT 尺度」と「学校生活スキル尺度」の基本統計量と学年差・性差を算出した。その結果, 「STT 尺度」では, 「安心感」「不信」「正当性」において学年の主効果が認められ, 1 年生は 2 年生・3 年生に比べ「安心感」「正当性」の得点が有意に高く, 「不信」の得点が有意に低かった。また, 2 年生は 3 年生に比べ「正当性」の得点が有意に高かった。1 年生と 2 年生が 3 年生に比べ「安心感」「正当性」の得点が高く, 「不信」の得点が低い傾向を示すこの結果は, 中井・庄司 (2006) の結果とほぼ一致するものであった。

一方, 「学校生活スキル尺度」では, 「自己学習スキル」「進路決定スキル」において学年の主効果が認められ, 1 年生が 3 年生に比べ有意に得点が高かった。1 年生・2 年生が 3 年生に比べて, 高い得点を示すこの傾向は, 飯田・石隈 (2002) の結果と一致するものであると考えられる。また, 「自己学習スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」「同輩関係スキル」において性の主効果が認められ, 「自己学習スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」では男子よりも女子の得点が, 「同輩関係スキル」では女子よりも男子の得点が有意に高かった。「自己学習スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」

において有意に女子の得点が高いこの結果は, 「自己学習スキル」と「集団活動スキル」において, 女子の得点が有意に男子よりも高かった, 飯田・石隈 (2002) の結果とある程度一致するものであると考えられる。庄司 (1991) は, 男子よりも女子の社会的スキルが高い傾向にあることを指摘していることから, 本研究の結果はこのような指摘にも一致するものであると考えられる。

一方, 「同輩関係スキル」において有意に女子の得点が低い結果は, 女子が男子に比べ「同輩関係」に対する感受性が強いことがその一因であると推察される。女子の対人関係における感受性の強さについては, 伊藤 (1993) が, 男子が自己確立を前提として他者との関係性を築くのに対し, 女子は他者とのつながりの上に自己を作り上げるという人格形成プロセスの差を指摘している。また, Stein, Newcomb, & Bentler (1992) も青年期を対象にした研究において, 男子は成功によって自尊感情が高まること, 女子は対人関係がうまくいくことによって自尊感情が高まることを指摘している。これらの指摘から, 男子に比べ女子は「同輩関係」に敏感である可能性が推察され, そのため, 男子よりも「同輩関係スキル」を難しいものと捉え, 「同輩関係スキル」の得点が男子よりも低くなった可能性が考えられる。

第 2 に, 「STT 尺度」と「学校生活スキル尺度」の相関係数を学年別に算出した。その結果, まず, 各学年とも「安心感」「正当性」と「同輩関係スキル」以外の, 各学校生活スキルとの間に弱～中程度の正の相関が認められることが明らかになった。この結果から, 生徒が「教師がいることによる安心感」を感じていること, 「教師との関係性に対する安心感」を感じていること, 「教師としての正当性」を感じていることが, 生徒の「自己学習スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」といった, 生徒の学校生活全般にわたる学校生活スキルと正の関連を示すことが明らかになった。

一方, 「同輩関係スキル」は, 他の学校生活スキルと比べ教師に対する信頼感と関連を示さな



いことが明らかになった。この結果から、学校生活におけるスキルの中でも、生徒の「友人関係」におけるスキルは他の学校生活スキルに比べ、教師に対する信頼感とそれほど関連を示さないことが明らかになった。この結果は、学校生活適応感の「友人関係」が生徒の教師に対する信頼感とそれほど関連を示さなかった中井・庄司（2005）の結果と一致するものであると考えられる。思春期は、「重要な他者」の対象が身近な大人から、友人関係へと拡大していき、友人との結びつきがより強くなる時期であると考えられる。そのため、生徒の対人関係が未分化な状態から、教師関係、友人関係と分化していき、教師関係と友人関係がそれほど関連を示さなかった可能性が推察される。

また、2年生・3年生では、「不信」と「同輩関係スキル」以外の、各学校生活スキルとの間に弱い負の相関が認められること、1年生では、「不信」と「自己学習スキル」と「進路決定スキル」において有意な関連が認められなかったものの、その他の学校生活スキルとは弱い負の相関が認められることが明らかになった。この結果から、各学年によって関連の様相が異なるものの、教師に対する不信感が生徒の各学校生活スキルと負の関連があることが明らかになった。

第3に、「STT 尺度」の類型による「学校生活スキル尺度」得点の差を検討した。各群の平均点と多重比較の結果から、まず、「自己学習スキル」「進路決定スキル」については、1年生で類型による有意差が認められなかったものの、2年生・3年生において、教師に対する「安心感」「正当性」の得点がともに高い「信頼型」の生徒の得点が高く、教師に対する「不信」が高い、「不信優位型」の生徒の得点が低い傾向にあることが明らかになった。この結果から、2年生・3年生においては、教師との関係性の違いと「自己学習スキル」「進路決定スキル」がポジティブな関連にあることが明らかになった。「集団活動スキル」については、各学年とも他の学校生活スキルに比べ、類型ごとによる有意な差異が最も多く認められ、特に、2年生において、

類型ごとによる有意な差異が認められることが明らかになった。このことから、各学年とも一貫して、教師との関係性の違いと「集団活動スキル」が関連している可能性が推察される。「健康維持スキル」については、2年生においてのみ「信頼型」の生徒の得点が高くなる傾向にあることが明らかになった。このように、「健康維持スキル」では、他の学校生活スキルに比べ、1年生・3年生において類型による有意差が認められなかったことから、教師との関係性と「健康維持スキル」はそれほど関連を示さない可能性が示唆された。「同輩関係スキル」については、各学年とも一貫して類型による有意差は認められなかった。「同輩関係スキル」と教師に対する信頼感が関連を示さないこの結果は、既述の「STT 尺度」と「同輩関係スキル」の相関分析の結果と一致するものであると考えられる。

以上の結果から、概して、2年生・3年生においては、①教師に対する「安心感」「正当性」の得点がともに高い「信頼型」の生徒は、4類型の中で高い学校生活スキルを有しており、他の類型に比べ高い学校生活スキルを活用し学校生活において積極的に活動に参加している群である可能性、②教師に対する「不信」が高い、「不信優位型」は、4類型の中で学校生活スキルが低いことから、学校生活スキルの獲得・遂行が低く学校生活において積極的に活動に参加できていない群である可能性、③教師に対する「正当性」が優位である「正当性優位型」は、「不信優位型」に比べれば学校生活スキルは高いが、4類型の中である程度学校生活スキルの獲得が困難である群の可能性、④教師に対して両価的な感情を抱く「アンビバレント群」は、「正当性優位型」と同様に、「不信優位型」に比べれば学校生活スキルは高いが、4類型の中である程度学校生活スキルの獲得が困難である群の可能性が明らかになった。これらのことから、2年生・3年生においては、生徒の教師に対する信頼感の類型によって生徒の学校生活スキルが異なる可能性が示唆され、概して教師に対する信頼感が高い生徒は、学校生活スキルが高い

可能性、教師に対する信頼感が低い生徒は、学校生活スキルが低い可能性が示唆された。

一方、1年生は、2年生・3年生に比べ類型による有意差がそれほど認められず、「不信優位型」「正当性優位型」「信賴型」「アンビバレント型」といった、教師との関係性の違いが、生徒の学校生活スキルとはそれほど関連しないことが明らかになった。小学生は、教師を何の評価、批判もせずに単に権威として受け止める傾向にあることが指摘されている（田崎, 1979）。本研究は、6月～7月といった入学からそれほど時間が経過していない時期に調査を実施していることから、1年生はそのような傾向を未だ維持していることも考えられ、そのため、教師との関係性が学校生活スキルにと関連を示さなかった可能性が考えられる。

このことから、生徒の教師に対する信頼感の類型によって生徒の各学校生活スキルが異なる可能性が示唆され、その関連の様相は学年によって異なることが明らかになった。

以上のことから、各学年によって、その関連の様相は異なるものの、生徒の教師に対する信頼感と「自己学習スキル」「進路決定スキル」「集団活動スキル」「健康維持スキル」といった、生徒の学校生活スキルが関連していることが示され、教師に対する信頼感が高い生徒は、学校生活において高い学校生活スキルを有し、良好な学校生活を維持している可能性が示唆された。

### 今後の課題

本研究において生徒の教師に対する信頼感と生徒の学校生活スキルには関連が認められることが明らかになった。これまでの研究においても、生徒の教師に対する信頼感の重要性は指摘されてきたが、既述のように、生徒の教師に対する信頼感の構成概念を明らかにし、実証的検討を行った研究はこれまで報告が限られている。そのため、今後も、生徒の教師に対する信頼感と生徒の心理的要因との関連など実証的な検討を重ね、生徒の教師に対する信頼感の心理空間的位置づけを明らかにしていく必要があると考

えられる。

### 引用文献

- Anderson, L.A. and Dedrick, R.F. 1990 Development of the trust in physician scale: a measure to assess interpersonal trust in patient-physician relationships. *Psychological Reports*, **67**, 1091-1100.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle* (selected papers of E.H. Erikson). Int. Univ. Press, New York (小此木啓吾訳 編 1973 『自我同一性』 誠信書房)
- 浜名外喜男・天根哲治・木山博文 1983 教師の勢力資源とその影響後に関する教師と児童の認知 教育心理学研究, **31**, 35 - 43.
- 浜名外喜男・北山鎮道 1988 教師行動の実験的変容が児童の学級適応に及ぼす影響 兵庫教育大学研究紀要, **8**, 63 - 73.
- 五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連. 教育心理学研究, **52**, 264 - 276.
- 飯田郁 2002 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して— 教育心理学研究, **56**, 367 - 376.
- 飯田順子 2003 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 学校心理学研究, **3**, 3-9.
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルと学校適応の関連 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, p497.
- 飯田順子・石隈利紀 2002 中学生の学校生活スキルに関する研究 教育心理学研究, **50**, 225-236.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
- 伊藤美奈子 1993 孤独感類型の変化から見た個人志向性・社会志向性の発達過程 心理学研究, **66**, 10-15.
- Johnson, G.C. and Swap, W.C. 1982 Measurement of Specific Interpersonal Trust: Construction and Validation of a Scale to Assess Trust in a Specific Other,

- Journal of Personality and Social Psychology*, **43** (6), 1306-1317.
- 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響に関する研究 - 学級の雰囲気に応じて教師はどうすればよいのか - カウンセリング研究, **30**, 207 - 215.
- 近藤邦夫 1994 教師と子どもの関係づくり 東京大学出版会
- 河野義章 1988 教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果 教育心理学研究, **36**, 161 - 165.
- 中井大介・庄司一子 2006 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 日本発達心理学会第 17 回大会発表論文集, pp. 719.
- 中井大介・庄司一子 2006 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, **54**, 453-463.
- 大野精一 1997 学校教育相談とは何か カウンセリング研究, **30**, 160 - 179.
- Rempel, J.K., Holmes, J.G., & Zanna, M.P. 1985 Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 95-112.
- Rotter, J.B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, **35**, 651-665.
- Rotter, J.B. 1980 Interpersonal trust, trustworthiness and gullibility. *American Psychologist*, **26**, 1-7.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12 - 22.
- Stein, J. A., Newcomb M. D., & Bentler, P. M. 1992 The effect of agency and communality on self-esteem: Gender differences in longitudinal data. *Sex Roles*, **26**, 465-483.
- 庄司一子 1991 社会的スキルの尺度の検討 - 信頼性・妥当性について - 教育相談研究, **29**, 18-25.
- 田崎敏昭 1979 児童・生徒による教師の勢力源泉の認知 実験心理学研究, **18**, 129 - 138.
- 山岸俊男 1998 信頼の構造 - こころと社会の進化ゲーム - 東京大学出版会

## Junior High School Students' Trust for Teachers and School-Life Skills.

Daisuke NAKAI

Ichiko SHOJI

The purposes of the present study were to investigate relations between junior high school students' trust for teachers and junior high school students' school-life skills. 457 junior high school students completed questionnaires. The results are described in the following. (1) It was clarified that junior high school students' trust for teachers related to other school-life skills not only the skills in " self-study skills " but also " career decision skills ", " group activity skills ", and " health maintenance skills ". (2) But junior high school students' trust for teachers didn't related to " peer communication skills ". (3) Secondly, students were categorized into groups by patterns of trusts for teachers. This clarified that the "distrust-dominant" and the "ambivalent" types of students have a low school-life skills at school, while the "trust" and the "expectation-dominant" types of students have a high school-life skills at school. (4) and the types of the relationships was different according to students grade.